

——北海に浮かぶステルラ大陸。

大陸一の規模を誇るステットラム王国は、建国より数百年の間、魔族との領土争いに明け暮れていた。

魔族を束ねる王・クロードは強大な氷魔法を操り、攻め入る人間たちをもれなく氷漬けにしてきた。

対抗するステットラム軍は選りすぐりの猛者を集めた魔道士・騎士の連合軍を送り込み、一進一退の攻防を繰り返していたが、王国最強の騎士と呼ばれ名の高い騎士団長・ベアトリスの躍進によりついに魔王軍を撃破。

魔王クロードとの一騎打ちと相成った。

第一章

「ベアトリス様……本当にお一人で行かれるのですか？」

崖下に見える魔王城を見下ろしていると、副団長のサイラスが、青ざめた顔で私へ問いかけた。

「ああ。クロードを止められるのは、私しかない」

「……ですが……魔王との一騎打ちなど、いくらベアトリス様でも……」

「……王国を護るためだ。この命に換えてでも、ヤツを倒してみせる」

「……どうか、ご武運を」

「後は頼んだぞ」

跪くサイラスと団員たちに別れを告げ、私は魔王城へと向かった。

ガキイイインッ！

渾身の力で振るった大剣が、丸腰のクロードの胸を撃つ。剣にビリビリと振動が伝わる。手応えは十分だ。

（やったか!?)

「おっと……油断したな。危ない危ない」

角度によっては紫色にも見える、烏の濡れ羽色の艶めいた髪を揺らし、猫のようなアーモンド型の金色の瞳を細めて、クロードは余裕たつぷりに微笑んだ。まるで蚊にさされたかのような扱いの軽さだ。

クロードは一見、闇色のマントを羽織ったのみという軽装だが、おそらく防御魔法が張り巡らされているのだろう。

王国最強の魔道士に火の魔法の加護を受け、クロードとの一騎打ちに挑んだが――
力の差は歴然。

満身創痍の私に対し、クロードはかすり傷すら負っていない。

力を振り絞り、ようやく一撃食らわせてやったというありさまだ。

「この俺に一太刀くれるとは。やるな、人間」

「雑な呼び方をするな。私の名はステットラム王国騎士団長ベアトリス。しかと覚えておけ」

「ベアトリス……か。良い名だ」

クロードはまるで花でも愛でるような眼差しを向けて私の名を呟く。

どうせ、無力な人間と侮っているのだろう。まったくもって不愉快だ。

「ここまで俺と対等に戦えたのはお前さんが初めてだよ、ベアトリス。屠ってしまったのは忍びない。どうだ？　俺のところへ来ないか？」

「断る！　魔族の軍門に下るくらいなら、私はここで討ち死にする！」

「そうか……悪い話ではないと思うんだがなあ」

クロードは顎をさすって唇を尖らせている。すっかり油断しきった様子だ。もしかしたら、今ならいけるかもしれない。

（あまり私を、舐めるなよ）

愛剣をグッと握りしめる。

もし失敗したら、あっけなくクロードに頭を吹っ飛ばされるかもしれない。そうやって散っていった同胞たちを何度も見た。

（怖れるな……！）

ガクガクと震える足を必死に踏みしめる。

私の肩には、ステットラム王国の存亡がかかっているのだ。ここで怖じ気づいてどうする！

（——いくぞ！）

カッと目を見開き、だんっ！　と地面を踏みしめて跳躍する。

「——はあああああああッ！」

剣を振りかざし、クロードの脳天目がけて振り下ろす。

あと少しで届く、というその時だった。

ドウツ！

腹部に鈍痛が走り、私は無様に地面へ転がった。

「あ……っ……」

視線を下に向けると、腹部へ深々と氷の矢が突き刺さっているのが見てとれた。

「惜しかったな。あと一秒早ければ間に合ったのに」

「おの……れっ……」

ごぼっ、と口から血が噴き出す。銀色の鎧の下に纏った白い制服が、赤黒く染まってく。

（ここ……までか……無念……）

霞む視界の中、クロードがまるで慈しむような笑みを浮かべている。

（最後まで……いけすかない男だ……）

やがて緞帳が下りるように視界が暗くなり——私は意識を手放した。

「……………」

目覚めると、私は柔らかなベッドに寝かされていた。

「ここは……？」

首をゆつくりと動かし、辺りを見回す。

装飾こそ簡素だが、家具はどれも選び抜かれた質が良いものであることは一目で理解出来た。

どうやら、客間のようなだが……なぜ私がこんなところにいるのだろうか？

（私は確か……腹を氷の矢で貫かれたはず）

身を起こし、自分の身体を確かめる。

血に濡れた制服は脱がされ、清潔なガウンを着せられている。

矢が貫通したはずの腹部は、何事もなかったかのように塞がっている。

それどころか満身創痍だった身体から傷はすっかり消えていて、出立する時より気力に満ちているように思える。

（一体……どうなっているんだ……？）

カチャリ、と静かにドアが開き、執事風の衣装を纏った痩せぎすの中年男が中へ入ってきた。よく見ると、両耳が人間より長く尖っている。

「お目覚めになりましたか、ベアトリス様」

彼から発せられる僅かな瘴気を嗅ぎ取り、反射的に身構える。

「……貴様は何者だ」

「私は魔王クロード様にお仕えるエンリコと申します。ベアトリス様の身の回りのお世話进行承りました。何か困ったことがございましたら、なんなりとお申し付けください」

エンリコは恭しく礼をしてみせた。

（どうということだ？）

思考が追いつかない。クロードが私の傷を癒し、ここで療養をさせているのか？ 何のために？

「失礼致します」

エンリコが上掛けをめくり、私の腹部に手を当てる。

「ふむ、傷は塞がっているようですね。この様子なら歩けるでしょう。クロード様のところへご案内します」

私の返事を待たず、エンリコは背を向けて歩き始める。

（私に、決定権はないというわけか）

しかし、クロードに会えるなら都合だ。色々聞きたいこともある。

私はベッドを降り、エンリコの背中を追って部屋を出た。

エンリコに連れられ、たどり着いたのは玉座の間だった。

広大な広間の中央奥の壇上にしつらえられた座具に、クロードが足を組んでふんぞり返っている。

「クロード様。ベアトリス様をお連れしました」

「ああ、ご苦労」

エンリコは一礼すると、すつと広間から出て行く。あとには、私とクロードが残された。顔色は良さそうだな。身体も回復したようだし何よりだ」

「……どういうつもりだ？」

クロードをキッと睨み付ける。クロードはただ愉快そうに笑うばかりだ。

「どうもこうも。死なせるのは惜しいと思ったから、助けただけだが？」

「フン……私を捕らえて王国との交渉にでも使う気か？」

「そんなまだるっこしい真似はしない。単にお前さんが気に入っただけだよ。ベアトリ
ス」

クロードは座具から立ち上がり、私の手を取った。

「力の差は歴然だというのに、臆することなく俺に刃向かおうとするその勇敢さ。俺に一太刀浴びせられる程の剣の腕。ちつばけな誇りに固執し命を簡単に捨ててまで俺に挑もうとする無鉄砲さ。実に愛らしくいじらしい」

褒められてるのかけなされてるのか全く分からない。どちらかというとなされてる気がするが。

クロードは私の前に跪き、手の甲にくちづけた。

「俺は、お前さんを娶ることに決めた。俺の花嫁になれ」

「……は？」

何を言っているんだこの男は。

宿敵である魔族の王と、なぜ私が結婚しないといけないのか。

「断る。私は魔族の軍門になど下らぬ！」

クロードの手を振り払い、眼光鋭くにらみ付ける。クロードは「おやおや」と肩を竦めて笑うばかりで、それがまたバカにされているようで腹立たしい。

「俺、結構尽くすほうだと思っぞ？ お前さんに不自由はさせない」

「ふざけるな。今すぐここから出せ」

「いやいや、無茶だろそれは。城の外は魔法の加護なしには歩けないのは知ってるだろう？ 今のお前さんじゃ、あつという間に魔獣の餌食だぞ」

「構わぬ。貴様の嫁とやらになるくらいなら、野垂れ死んだほうがましだ」

「命を粗末に扱うもんじやない。折角助かったんだ、ここでノンビリ暮らした方がいいと思うが」

何故そんなに私を引き止めるんだ？

王国との交渉材料に使わないのなら、こんなに手厚く保護する意味はないと思うが。

（……ああ、そうか）

私を妻という名の奴隷にして、一生辱めるつもりだな？　ならば納得がいく。

恥をさらしてまで生き残るつもりはない。ステットラム騎士団長の名を汚さぬよう、潔く散るまでだ。

そつと舌を出し、思い切り歯でかみ切ろうとした、が――

「――ッ!？」

クロードの指が私の口に突っ込まれた。

「まったく……油断も隙も無い。どうしてすぐ死のうとするのかねえ」

「ふぐっ……離せ……ッ!」

ぐちゅぐちゅ、とまるで口内を弄ぶかのようにかき回される。

嘔みついてやろうかと思ったが、器用に私の口の端を押し広げて動きを止められてしまった。

「しかし、この調子でしょっちゅう自害を図られては困るな。少し細工をしておくか」

金色の瞳が私を捕らえる。刹那――

「……ッ!？」

キーン——と耳鳴りのような音が響いて、頭の芯を直接握られているような感覚に囚われる。

（——お前を覆っている鎧を、全てかなぐり捨てろ。本能に忠実になれ）

頭の中のクロードの声が響いて、わんわんと反響する。

しかしそれは一瞬のことで、すうつと頭の奥に吸い込まれるように声は消えていった。

「……よし、今回はこれくらいにしとくか」

すつ、とクロードの目が細められ、私から手を離す。

「……何を……した？」

「すぐに分かる」

「はぐらかすな！ 答えろ——ッ!？」

不意に、下腹部が熱を帯びた。

熱はあつという間に全身に回り、ずくん♡と腹の底に衝撃が走る。

（なんだ……これは……ッ!？）

毛穴からぶわつと汗が噴き出す。

下腹部——具体的に言う子宮の辺りがきゅんきゅん♡と切なく疼いて立っていられないほどだ。

「効いて来たようだな。どうだ？ もう自害なんてする気にはなれないだろ？」

「ふぎ……けるな……っ♡あつ……はああ……♡」

自分の身体をかき抱き、中腰になって震える身体を必死に抑える。喉も、口の中も、まるで風邪でも引いたときみたいに熱を帯びて。

頭の中に桃色の霧がかかったみたいに、ゾクゾク♡する。

今まで体験したことのない感覚に、ただ戸惑うばかりだ。

「俺の妻になるのだから、まずは初夜の準備をしないとな」

ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべるクロード。

おそらく、何らかの術を用いて私の五感を操っているに違いない。

身体は狂おしく悶え、唇からは目の前の男を求める言葉が飛びだしてきそうだ。

（こんな卑怯な男に……絶対に屈するものか……ッ）

「ふーッ……♡ふーッ♡」

唇を噛みしめて、必死に欲情の声を押し込める。するとクロードが私へ近づき、耳元で甘く囁く。

「どうだ？ 俺のちんぽがほしくて仕方がないだろう？」

「誰が……ッ♡あつ……はああ……♡ちんぽ……なんて、ほし……♡あつ、はあああ……♡」

（わ、私はなんて淫らな言葉を……！）

自分が発した言葉にぎよっとする。

が、一度口にしたことでタガが外れてしまったのか、勝手に足が大きく開き、腰がカクカクと下品に揺れる。

「ちんぽお……♡ほしい……♡クロード様のでっかいおちんぽお……♡」

いつしか噛みしめていた唇はだらしく半開きになり、ヨダレと共に卑猥な言葉がとめどなく溢れてくる。

（違う！ これは私の意思ではない……！）

けれど、淫らなおねだりを止めたくても止められない。まるで私ではない誰かに操られているようだ。

（クロードめ……！ 私の身体を乗っ取ったのか……！）

「お前さんの二つ名は『紅蓮の乙女騎士』だったか？ 無様な姿に成り下がったものだな」

「はいっ♡私はクロード様のおまんこ奴隷ですっ♡どうかこの卑しいおまんこにクロード様の尊いおちんぽをくださいませ♡」

ぱっ♡と自ら両足を開き、腰を突き出して股間をクロードに見せつける。

（違う違う違う！ やめろ！ これ以上惨めな姿を晒させないでくれ……！）

頭の中で叫んでも、誰にも届かない。

まるで、思考だけ牢獄に閉じ込められてしまったかのようだ。

蕩けた顔つきで淫らなポーズを取る私を見つめ、クロードは「ふむ」と渋い顔つきになった。

「術が完全ではないようだな。……いや、お前さんの自我が強すぎるのか。たいしたものだ」

（……何を言っている？）

自分の意思では言葉を発することも、指一本動かすこともままならないというのに。クロードはじつと私の顔をのぞきこむ。

「まあ、それはそれで楽しめるか。じっくり堕とすでしょう」
クロードがパチン、と指を鳴らす。

私の足元に魔法陣が浮かび上がり、ぬるり……と肉色をした、タコの足のような生き物が私の足元にとぐろを巻いた。

（ヒッ……！ な、なんだこの薄気味悪い生き物は……！）

にゅぶ……ぬるる……

肉色の物体は次から次へと湧き出てくる。

形状は多様で、太いタコの足のようなものもあれば、ミミズのように細い肉紐のようなもの。中には先端に無数の突起がびつしりと生えているおぞましいモノもあった。

（イヤだ……来るな……ッ！）

身をよじって逃れたくとも、身体が動かない。がに股のまま固まっている私の両足首と両手首にはミミズ状の細い肉紐が巻き付き、両足左右からグツと引つ張られる。

（何を……するつもりだ……！）

ぬるう……と足元で蠢いていたタコ足が、私の足を這い上ってきた。

ネバネバした体液を纏ったそれが動く度に、べちやつ♡べちやつ♡と私の肌に粘液が塗
りつけられる。

（気持ち悪いっ……！！）

嫌悪感でいっぱいのはずなのに、身体はくねって触手を誘っているかのようだ。

べちや……♡べちや……♡ぬるう……♡

先端に無数の突起が生えた触手が、乳首に吸い付く。

「ひうんっ♡♡」

突起がうごうご♡と蠢き、乳輪を柔らかく撫でる。

さざ波のような微弱な快感に絶え間なく苛まされ、やがてそれは大波となって私を昂ぶ
らせる。

（やめろッ、触るな……ッ！）

そう叫びたいが、半開きの唇からこぼれるのは、甘ったるい吐息まじりの嬌声ばかりだ。

「あうん♡ちくびっ♡んぎもぢいっ♡もっところりゅこりゅしてええ♡」

くりゅん♡と突起が乳首を強く吸い上げると、きゅうううう♡と乳首が引つ張られて甘い痺れが乳房全体に広がった。

「あっはああ♡しゅきっ♡乳首っ、弄られるのしゅきいい♡」

「そうかそうか、そんなに乳首をチュウチュウ♡吸われるのが好きか。お前さんは痛いのも好きそうだなあ。おっぱいをもっとぎゅうぎゅう♡締め上げてやろう」

タコ足触手は私の乳房に巻き付き、根元からぐつと搾り上げてきた。

「んっ、おとおおッ!？」

乳房が千切れそうなほどに強く締め上げられているというのに、駆け巡るのは搔痒感に似た愉悅だった。

突起で乳首をこね回され、ぞぞぞ♡と吸い上げられる。

タコ足触手でごしごし♡と容赦なく乳腺を扱かれ、乳房が真っ赤に腫れ上がる。

痛みと痒みで感覚がもうぐちゃぐちゃだ。

なのに、私は目を剥いてだらしなく口角を下げ、聞くに堪えないような喘ぎ声を垂れ流している。

「おっほ♡んお♡乳首いい♡こねこねっ♡んぎもぢい♡もっとおお♡もっ乳首吸ってええ♡」

「ハハハ、いい声で鳴くじゃないか。まるで豚みたいで可愛いぞ、ベアトリス。乳首をこねこね♡されるのがそんなに嬉しいか？」

クロードに嘲笑され、はらわたが煮えくりかえるほど悔しいのに。

口について出て来るのは、濁った卑猥な喘ぎ声ばかりだ。

「ぎもぢいい♡乳首こねこねんぎもぢいい♡おお〜♡♡」

しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡しゅっ♡

くりっ♡くりっ♡くりゅ♡こりこりっ♡♡

乳房を根元から扱かれながら、乳首の先端をうねる肉突起に撫で回される。

人外が与える快楽は既に許容範囲を超えていて、頭がショートしそうなのを紙一重で踏みとどまっている状態だ。

「んっ、お。おおっ♡んほっ♡おっ♡。おおっ♡らめっ♡乳首で甘イキしちゃうん♡♡♡」

媚びをたつぷり含んだ甘い声は、自分のものではないようで。

腹の中は淫熱がぼうつと広がっていて。

どんどん頭の中が快楽に侵食されていくのがおぞましく、恐ろしい。

（やめろやめろやめろやめろおおおお！ これ以上私を辱めるな……！）

「ん。んん♡んおっ。おおおお——ッ！」

ふしゅううう♡♡

透明な液体が、私の股間から吹き上がる。

(なんだ……これは……)

尿を漏らしたのかと思ったが、内ももを濡らす液体は無味無臭だ。

「ハハ、潮まき散らしてイキ狂ったか。ガチガチの頭と違って、まんこはやけに素直じゃないか」

「はっひ……♡あああ……♡♡」

(イク？　これが？)

初めて知る感覚に、戸惑いを隠せない。

同時に、自分の体を好き勝手されている苛立ちもこみ上げてきて、唇を噛みしめる。

(私はステットラム王国騎士団長・ベアトリス！　こんな下等生物に弄ばれた程度で堕ちてたまるものか！)

どんなに肉体を穢されても、心だけは守り抜く。それが騎士としての矜持というもの。

そんな私の胸の内を読み取ったのか、ふ、とクロードが唇を歪めて笑う。

「やれやれ、なかなかしぶといな。普通の女なら秒も保たないはずだが」

(私を見くびるなよ)

という思いを込めてクロードをにらみ付ける。実際にはだらしなくふやけた笑みを浮か

べているのだが。

クロードは私の足元にしゃがみこみ、股間をのぞき込み始めた。

「でも、ここまで耐えられるならコッチも試せるな。お前さんの純潔を確かめさせてもらうぞ」

くにつ♡ぐにい♡♡

「ひゃうう♡♡」

肉唇を両脇から細い肉根に引つ張られる。

(くっ……何をするつもりだ!?)

「綺麗なピンク色だなあ。見とれてしまうくらいに鮮やかで美しい。剥き出しになったヒダヒダがくぱ♡くぱ♡と物欲しげにヒクついているぞ？ うん、いいまん肉だ」

奥の奥まで露わになった肉穴に顔を近づけ、クロードがうつとりと呟く。

彼が何か言うたびに、熱い吐息がかかって肉ビラを震わせる。

「やめろお……♡見るなあああ……♡」

「妻のまんこを見て何が悪い？ どうせなら味見もしつかりしておかないとな♡」

クロードがれろり、と肉厚の長い舌を這わせた。

「あひいい♡♡♡」

(し、舌でおまんこを舐められている……ッ！ 熱くて、ぬるぬるして……♡♡♡♡♡)

初めて知る快感に、頑なに守り抜いてきた矜持がどろりと溶けそうになる。

それほどまでに直接粘膜に触れられるのは快く、舌先が粘膜の襞をぞりり♡と舐め上げるたびに理性を手放しそうになる。

「ん……ちゅううう……♡お前さんのまんこの味は格別だな。トロトロに蕩けて極上の果実のようだ。ちゅるる……♡吸い付くとどんどんまん汁が溢れてくるぞ？ とんでもないエロまんこだなあ」

「おおおっ♡おまんこの中ああっ♡れろれろっ♡らめええ♡♡」

ぴちゃ♡れろれろ♡ちゅうう♡♡

膣粘膜にちゅうつと吸い付かれ、ヘソの裏をざらりと舐め上げられる。

ツン、と腹の底を突かれるような感覚が生まれ、じゅん♡と膣肉が潤む。

れろり、と狭い肉筒を舐める舌の動きが止まる。弾力を持った肉襞が舌を強く押し返し、拒んでいるかのようなのだ。

「お……これが処女膜か？ くくつ、俺のために純潔を守ってくれていたのだな。嬉しいぞ、ベアトリス」

(誰が……貴様などにッ……！)

クロードの舌がずるん♡と引き抜かれる。

代わりに、タコ足状の肉根がつぷりっ♡と淫裂に差しこまれ、ズブズブとその身を埋めてゆく。

「は……♡♡ひいいい♡♡」

強烈な悦痺が全身を駆け巡った。

胎内をミチミチと割り開かれ、得体の知れない何かに占拠されていく。

おぞましくてたまらないのに、膣肉は歓喜にわななき、触手を食い締めている。

「俺のモノは人間には荷が重いからな。まずはコイツで、奥の奥までじっくりほぐしてやろう」

ずにゅ……♡ずにゅ♡ずにゅ♡

触手が膣口をゆつくりと擦り、浅い抽送を繰り返す。

じゅわっ♡と淫熱が下腹部を取り巻き、勝手に腰がくねってしまふ。

「どうだ？ 触手ちんぽもなかなかのモンだろ？ まんこがうねってぎゅうぎゅう♡締め付けて来てるじゃないか」

「あつひ♡おまんこお♡触手ちんぽにつ♡こしこしされてっ♡にやにこれっ♡しゅごいい♡」

ぬっち♡ぬっち♡ぬっち♡

ピストンは次第に深くなり、ヘソの裏をこしこし♡と擦りはじめた。

急激に、膣底がきゅううん♡と縮み上がるのが分かる。

「んおお♡これえ♡しゅごっ♡しゅきっ♡♡しゅきいい♡♡」

（ああ……♡やめてくれえ♡♡これ以上されたら、私は……っ♡♡♡）

「ククッ、いいぞ。そのまま身を快感に委ねるんだ。何も考えるな。お前さんはただ肉欲に溺れて、メスに堕ちてしまえばいい」

クロードの声が酷く優しく耳朶を打つ。

身体の芯を蕩かすような愉悦は確かに心地良く、思考がどんどん鈍くなっていくのを感じる。

にらみ付けようとするが、与えられた喜悦に目尻がだらしなく垂れ下がるばかりだ。

「おう♡♡おっ♡♡ おおお♡♡♡」

途方もない快樂ばかりを流し込まれて無様に喘ぐ様は、まるで生き地獄だ。

（こんな屈辱を味わうなら、いつそ……）

いつそ——なんだ？

……あれ？

こういう時に取るべき行動指針が確かに存在していた気がするが……思い出せない。まるでごっそりそこだけ記憶が抜け落ちているみたいだ。

にゅっ♡にゅっ♡にゅっ♡

愛蜜と粘液でぬとぬと♡になった肉根が処女膜を押し込めて更に奥へと押し入ろうとする。

その時だった。

腹の底から強烈な不快感がこみ上げてきて――

不意にぱちんっ！ と頭の中で何かが弾けた気がした。

「……ッひ……やめろおおおおおッ！」

私の絶叫が、静まりかえった玉座に響いた。

「はあ……ッ、はあ……ッ、はあ……ッ」

ゆつくりと呼吸を繰り返す。

拘束された片手の指を動かしてみると、私の意思で、指先が動かしている。

どうやら、術が解けたようだ。

「これは驚いた。まさか俺の精神操作を自力で解除するとは」

クロードが目を丸くする。が、その顔は驚愕というよりは、新しいオモチャを見つけた喜びに満ちているように見えた。

「こんな人間は初めてだ、面白い。ますます気に入ったぞ」

「貴様に気に入られたくなどない」

「まあそう言うな。せっかくだから、正気のままイカせてやろう」

クロードが私の尻をさわさわ♡と撫で回す。

術は解けたはずなのに、微弱な刺激を与えられてびくん♡と尻肉がひきつった。

「くっ……♡」

「……といつても、精神操作が解けただけで、性感は高まったままだ。狂わずにどこまで耐えられるか……見ものだな」

ずるう……♡

細い肉紐が何本も臀部に集まり、尻肉をくちり♡と割開く。

谷間に埋もれている慎ましい菊穴を、肉紐の先端がちゃんと突いた。

「……ッ、まさか……そっちは……不浄の穴だぞ!？」

「だから犯すんだろ？　なあに、すぐに悦くなる」

「ひ……ッ、やめろ……やめろおおおおおッ!」

ぬちっ♡ぬちっ♡ぬちっ♡

尻穴の皺を丹念に引き延ばすように、肉紐が引つ張りくるとアナルを撫でる。

粘液をぬとぬと♡と塗り込められ、てらてら♡と光る窄まりに、肉紐の束がつぷり♡と

差しこまれた。

「あ、あつ……ひぐうううッ♡♡」

ずぶ……♡にゅぶぶぶ♡♡♡

肉束がゆつくりと肛門をこじ開け、中へと入ってくる。

ぢゅっこ♡ぢゅっこ♡ぢゅっこ♡

狭い菊蕾を、肉紐が浅く抜き差しする。

不快感でいっぱいのはずなのに、僅かに快感が混じって——吐き気がしそうだ。

「クク、ケツまんこがひくひく♡悦んでるじゃないか。中をほじくりかえされる度に、肛門粘膜がめくれあがつてとろとろ♡に蕩かされてるぞ？　もしかしてまんこより、ケツまんこでちんぽを咥え込む方が好きだったか？」

「うる……さい……♡く……あああ……♡♡」

意識が飛びそうになるのを必死で堪える。

精神操作とやらをされていけないだけ、まだと思いたいが——与えられる快感は脳を灼くには十分すぎるほどで。

気を抜くと、唇から卑猥な喘ぎが漏れ出してしまいそうだ。

（絶対に……この男には屈しない……！）

いくらこの身体を穢されようとも、心だけは渡さない。

ステットラム王国騎士団長の誇りに賭けても！

「まだ踏ん張ってるのか、強情だな」

クロードが呆れ顔で肩をすくめる。

「……いくら肉体を苛もうとも、私は絶対に貴様に屈しない」

「ハハ、いいね、その顔。お前さんに睨まれるとゾクゾクするよ」

クロードが私の腰を抱き、自分の股間を押しつける。

ぬる……♡と熱っぽく硬い物体が肉溝に密着しているのが視界に入り、ぞつとして腰を引く。

「ひ……ッ！」

天を突くほどに反り返った隆起。クロードの股間には、それが二本生えていた。

「な……なんだそれは……ッ！」

「何って、ちんぽだけど」

「それは分かっている！ な、なぜそんなものが、二つも……ッ」

「ああ、人間は一本しかないのか。不便だな。魔族は基本的にちんぽが二本生えてるんだ。これで二人の女を同時に犯すことも可能だ。効率的だろ？」

事も無げに言われ、絶句する。

（こんな太くて硬いものを、二本も挿れられたら……♡♡）

一瞬淫らな妄想が頭をよぎり、慌てて振り払う。

（な、何を考えている!? 汚らしい!）

「クク、ちんぽに興味ありそうな顔してるな」

「貴様にそう見えているだけだろう。その汚いモノを早くしまえ」

「そうだな。お前さんをイカせたらさっさとしまおうよ」

ぬりゅ……♡

熱硬い肉棒が、淫唇をぬるる♡と滑り、肉芽をぶちゅ、と押し潰す。

途端に、強烈な悦痺が腹の底から湧き上がった。

「ひやうううう♡♡あつ、そ、そこお♡触るなあああ♡」

「おお……♡いい反応だ。ちよつとクリを押しただけで随分とヨがるんだな。よし、もつと弄ってやろう♡ほら、大好きなちゃんぽでクリコキしてやろうじゃないか♡」

ぬりゅ♡くに♡くに♡につ♡

亀頭の先端で勃起上がった淫芽の根元を擦られ、びりびり♡と電流を流されたみたい
に甘く痺れる。

主の動きに呼応するかのように、乳房やアナルに纏わり付いている触手たちも、一斉に
動き出す。

ぬぢゅっ♡ぬぢゅっ♡ぬぢゅっ♡

すつかり蕩けた菊座を、肉紐が深く穿つ。

肉紐の束はいつしか太さを増し、肛門の行き止まりまで侵入するとどちゅ♡どちゅ♡と
突き上げてくる。

腹の底を押し上げられるような圧迫感で、口から内臓が飛び出そうだなのに――

(ぎもぢ……いいいい♡♡♡おしりッ♡熱くてっ♡蕩けそう♡♡)

不快感を遥かに上回る圧倒的快感。

腹の底がぎゅっ♡と絞り上げられるような感覚は、未知のもので。

更にそれを上塗りするかのようには、乳房を扱かれ、乳首をぞりぞり♡とブラシ状の肉粒で擦られる。

「あつ♡やめ……もうやめろおお♡。おつ、おお、ぐつ、あ、ああ♡」

「お前さんが俺の花嫁になると宣言してくれたら、すぐにやめるけどな？」

「誰が……ッ♡ひいいいい♡♡♡」

ぐにゅうう♡♡ぐに♡ぐに♡ぐに♡

肉竿が小刻みに揺れ、ぱんぱん♡に膨らんだ肉芽をぶぢゅっ♡と亀頭を押しつける。

ぐに♡ぐに♡ぐに♡

クロードは円を描くように腰を使い、器用に淫核を責め立てる。

クリトリスからダイレクトに頭のとっぺんまで快感が突き抜けて、へこへこ♡と腰が揺れてしまう。

「ひ……はああああ♡あつ♡。おおっ♡そこおお♡弄るのやめろおお♡」

「クク、もう限界なんじゃないか？ そら、クリが俺のちんぽに媚びてすりすり♡してるじゃないか。本当はクリイキしたいんだろ？」

「素直になれよ。ほら、ちんぽでクリシコシコされてアへ顔晒してイっちまえ。イってただのメス犬になれ……！」

ぐに♡ぐに♡ぐに♡ぐに♡

じゅっ♡こ♡じゅっ♡こ♡じゅっ♡こ♡じゅっ♡こ♡

怒張の先端がピストンを早め、執拗に勃起クリトリスの裏筋を責め立てる。

ぶっくり♡膨れあがった尻穴を膨張した肉紐が出入りする度に、粘膜がめくれあがって引つ張り出され、快楽の粒が弾けてぶわっ♡と全身に広がる。

「イヤだああああ♡イぎだくないっ♡絶対に、イぎだくないいいいい♡♡」

唇を引き結び、ふるふると首を横に振り呻く。

もうとつくの昔に身体は限界に達していて、少しでも刺激を与えられたらすぐにでも意識が弾けとんでしまうだろう。

（これ以上はもう……やめてくれ……♡）

だが、許しを乞うのはすなわち敗北。

それだけは絶対に、口にするわけにいかない。

「まったく……強情もここまでくると感心する……なッ！ さっさと俺のちんぽ嫁になっ

てしまえば楽なものを。だが、それでこそベアトリス。だったら徹底的に尻をケツまんこに改造してやる。尻イキをしつかり覚えこませてやるぞ♡」

クリトリスを強くすりつぶされると共に、肛門をごりごりつ♡と挟り込まれる。

絶え間なく蠢く乳首ブラシの刺激が更に止めを刺し、背筋を一気に快楽電流が駆け上る。「そら♡そら♡尻を触手ちゃんぽに犯されて、ちゃんぽでシコシコ♡クリコキされて潮まき散らしてアクメしちゃえ♡」

(ダメだ♡イッてしまうツ♡イキたくない♡イキたくない♡イキたくない♡イキたくない♡)

「おごつ……♡ おおおおおおおん♡イ……イイ いいいいいい♡♡♡」

ぷしやあああ♡と二度目の潮がヒクつく肉唇から盛大に吹き上がった。

(ああああ……♡イってしまった……♡)

呆然としたまま、床にぶちまけられた透明な液体を見つめる。

クロードは満足げにその様子を眺めている。

「ハハ、潮びゅーびゅー♡巻き散らかして盛大にイッたなあ。しかしここまで耐えるとはさすがの精神力だ。感服したぞ。これは躰がいがありそうだ」

「……ッ、はあ……ッ、はあ……ッ、はあ……ッ、貴様……殺して、やる……」

「ハハ、見上げた根性だな。死なれるより全然愉しそうだ。いいぞ、いつでもかかってこい」

クロードが微笑み、私の頬に口づけた。

第二章

——翌朝。

私はまた客間で目を覚ました。

クロードに陵辱の限りを尽くされた後、湯浴みのあと清潔なガウンを着せられ、エンリコにベッドへ寝かしつけられてしまった。

とはいえ、怒りと屈辱で一晩中眠れない夜を過ごしたのだが。

（奴め……何を考えている？）

私を花嫁にするなどと馬鹿げた事を言い出したが、冗談じゃない。私に恥辱を与えておいて、よくもそんなことが言えたモノだ。

今すぐにでも殺してやりたいが、愛剣は取り上げられてしまったのか見つからない。なんとか武器を見つけ、ヤツの寝首をかきたいところだが。

（どうしたものか……）

コンコン。

ノックの音がし、エンリコがガラスの皿に美しく盛り付けられた果実を持って部屋へ入ってきた。

「失礼いたします。朝食をお持ちいたしました」

エンリコはサイドボードに皿を置くと、一礼してすぐに出て行った。

「……」

極彩色の果実は、どれも見慣れないモノで食べる気が起きない。そもそも魔族の食べ物など口にしたくもないが。

ぼんやりと皿を眺めていると、ナイフが添えられていることに気づく。

（これは……果物を自分で剥けということか……？）

ナイフを手取る。小さいが、武器としては充分使えそうだ。

これで、クロードに接近すれば——首を掻ききることもうはいは出来るかもしれない。

（……よし）

私はナイフをぐつと握りしめた。

コンコン。

またドアをノックする音がする。

「誰だ？」

問いかけるとすぐに「俺だ。クロードだ」と返事が戻ってきた。

こんなに早くチャンスが訪れるとは。緩みそうになる頬を引き締め「どうぞ」と平坦な声で返す。

クロードがご機嫌な様子で部屋に入ってきた。

「具合はどうだ？」

「どうもこうも、見ての通りだが」

「健康そうで何よりだ。どうだ、朝の散歩でも一緒にしないか？」

「……そうだな。外の様子も見てみたいし。突き合おう」

「良かった。着替えはクローゼットに入っているから、適当に好きな服を見繕ってくれ。
部屋の外で待っている」

クロードはそう言うと言と部屋を出て行く。

私はクローゼットを開け、出来るだけ動きやすそうな衣装を選んで着替える。

ナイフは靴下止めに挟むと、何食わぬ顔で部屋を出た。

「待たせたな」

「……！」

着替えた私を見た途端、クロードが目を輝かせる。

「……？ どうした」

「いや……ドレス姿も可愛いな、と思っただけ。とてもよく似合っているぞ、ベアトリス」

クロードが目を細めて微笑む。

こんな格好を褒められるのは不本意だ。

ドレスなんて、本当は私に必要ないものなのに。

「……バカバカしい。早く行くぞ」

「おいおい、出口も知らないくせに先に行くなよ」

足早に歩き出す私を、クロードが慌てて追いかけてきた。

青々と葉を茂らせた木々の間から、木漏れ日が差しこんでくる。

やや肌寒さはあるが、朝の清浄な空気が心地良く、頭をすつきりとさせてくれる。

予想に反して、魔王城周辺の森は穏やかで心地良かった。

「どうだ？ なかなか悪くないだろう？」

「……小鳥のさえずりは聞こえないんだな」

「ああ。なんだかんだでこの辺は寒いからなあ。水鳥なら、近くの湖に来るぞ。見に行くか？」

「結構」

にべもなく答えると、クロードが「そうか」と微笑んで答える。

並んで歩くクロードは穏やかで優しく、時折私が躓いて転ばないよう手を貸してくれる。

昨日私を蹴りつくした男と同一人物とは、とても思えない。

だからこそ、信用ならないのだが。

笑顔で人を殺めるような男だ。この優しさはまやかしに過ぎない。

(……やはり、こいつを生かしておくわけにはいかない)

私の誇りを踏みにじった報いを受けさせたい気持ちもあるが——この男はステットラム王を存亡の危機に追いやった魔族の王。

どんな手段を使っても、やはり屠らねばならないと決意を新たにする。

「あっちの方には果実園があるんだ。行ってみるか？」

呑気に私の少し先を歩くクロードへ、音もなく近付く。

そつとスカートの中に手を忍ばせナイフを引き抜くと、一気に首筋へ刃を滑らせた——はずだった。

「……つたく、油断も隙も無い」

クロードは口元に笑みを浮かべたまま、私の手首をぎり、と握りしめた。

「……ッ！」

「なんとなく、殺られそうな気はしてたがな。お前さん、殺気が消し切れてなかったぞ」

(気づかれていたのか……！)

私が殺そうとしているのを知っていて、わざと呑気に振る舞っていたというのか。

もつとじっくり策を練るべきだったと後悔したが、もう遅い。

「離……せ……ッ……」

力づくで腕を振り払おうとするが、クロードはびくともしない。それどころか、余裕た

つぶりの笑顔すら浮かべている。

悔しい。私はこんなにも無力だったのか……！

「いつでも殺しに来いとは言ったけど、実際やられて無罪放免、ってワケにはいかないな」

「何を……するつもりだ……」

「そりゃ、愉しいお仕置きに決まってる。むしろ、そっちから襲ってくれていい口実が出来たよ。感謝する」

「くっ……！」

クロードがぼちん、と指を鳴らすと、魔法陣が私の足元に浮かび上がる。

ずるうう……♡と先端がチューリップの蕾みのように膨らんだ肉根が這い上がってきて、私の足首へぬるり♡と絡みついた。

「ひっ……！！ や、やめろ……っ」

昨日、触手で身体のある部分をまさぐられ、徹底的に快感を叩き込まれた記憶がまざまざと蘇る。

私の右手にはまだナイフがしっかりと握られているというのに、指一本動かすことができない。

このナイフで肉根を断ち切つてしまえば済むはずなのに。

ぬるう……♡ずる……♡ずる……♡

肉根はうぞうぞと蠢き、私の手足を拘束すると、器用に私の衣服を脱がし始める。

ぶるん♡と乳房が露わになり、めくりあげられたスカートから股間が剥き出しにさせられる。

（そ、外でこんな格好をさせられるなんて……ッ）

恥ずかしさで頬がカアツと熱くなる。人通りはないとはいえ、野外で裸同然の格好をさせられるなど屈辱以外の何者でもない。

「昨日、お前さんの身体のナカは調べ尽くしたしな。今日は俺好みの仕様に整えろとするか」

クロードが顎に手をやり、愉しげに言う。

肉根がすりつ、と私の乳房に這い寄り、膨らみがくばっ♡と花のように開く。

膨らみの裏側にはびつしりと微細なブラシのように肉粒が生えていた。

（き、気持ち悪いッ……！）

ぞわつと背筋が寒くなる。

膨らみは私の乳房にべったりと張りつくつと、むにつ♡むにつ♡と揉みだきはじめた。

「く……♡ひゃああ♡触る……なあああ……♡」

身を振って抵抗しても無駄だと言わんばかりに、触腕は両乳をくにくに♡と柔らかく揉

み続ける。

おぞましきで震えていた背筋は、いつしか与えられる快感に浸され、甘い吐息がこぼれはじめる。

（……っ♡はああ♡こんなッ♡化け物ごときにっ♡感じるなんて♡ありえないのにッ……♡）

肌に肉粒が触れるだけで身体が火照ってきて、下腹部がきゅんきゅん♡と切なく疼く。

「クク、昨日よりさらに感度が上がっているようだな」

「貴様……また私に何か仕込んだな？」

「さてねえ？ 性感は高まったままだが、今日は何もしていないぞ？ 悶えるお前さん

を見る方が嬉しいからな」

「フン……あ、悪趣味……だなっ♡そんなにっ♡私の♡無様な姿を見て……ッ♡ああッ

……♡嬉しいのか……？」

悪態をつこうとしても、乳果を絶え間なく撫でられてあえぎ声にとって変わられる。

情けない。これがステットラム王国最強と謳われた騎士の末路とは。

「最高に嬉しいねえ。全てを捨ててメスの本能剥き出しでヨがるお前さんを見ているのが一番の娯楽だよ」

「人を……っ♡見世物みたいに扱うな……っ♡ッ、はあああああんッ♡」

ぢゅううううううううッ♡

肉蕾が乳房を強く吸い上げる。

途端にびくびく♡と全身が波打った。

「んおおおっ♡ちくび♡吸うなあああっ♡」

昨日叩き込まれた快感が蘇り、仰け反ってケモノじみた呻きをあげてしまう。

更に肉蕾は乳首に空いた微細な穴を穿つように、細い針状のものをぶすぶす♡と刺してきた。

「ひうううう♡やめ♡やめろおお♡」

針がぶつぷつ♡と乳首の穴に刺さる度に、痒みに似た疼きが生まれてもどかしさに身をよじる。

ちゅううう……♡ちゆく♡ちゆく♡

乳首の穴を広げるようにそれぞれの針が蠢くと、更に疼きが大きくなる。

「ひぐううう♡それ♡らめ♡らめえええ♡」

不意に、どろりとした冷たい液体が、乳首穴から流し込まれる。

「ひゃううう……♡♡♡」

液体はあつという間に乳線を浸し、乳房全体を侵食していく。

（何だこれは……ッ♡♡クロードめ♡一体何をしたんだ……ッ♡♡）

むずむず、と乳首の搔痒感が一層大きくなる。逃がしどころが分からず乳房をたぶん心と揺らしてひたすら尻をふりふり♡するしかない。

「悪いな、もう少しの辛抱だ。お詫びにキツめに弄ってやるから」

クロードが軽く手を振ると、細い肉紐が私の乳房にぎゅうううう♡と巻き付いた。

「あつ♡あつ♡おおお♡い、いた……♡♡」

「お前さんは、痛い方が好きだろう？ まんこぐしよぬれじゃないか」

「だ、誰が……♡おおお♡ふざけるな♡はっ♡んあああああ♡」

ぎゅむ♡ぎゅむ♡と肉紐が容赦なく乳房を苛む。

時折ふつと緩んだかと思うと、ぎゅうううう♡つと更に強く締め上げてきて。

緩急をつけた愛撫に、私はすっかり翻弄されていた。

こすっ♡こすっ♡

ぎゅむ♡ぎゅっ♡ぎゅっ♡

乳房を肉粒ブラシで擦られ、乳肉を肉紐でぐるぐる巻きにされて真っ赤になるまで締め上げられる。

「んうううう♡あううう♡んっ、ふううう♡♡乳首っ♡ごしごしするなっ♡」

へこへこ♡とがに股になり腰を揺する。

「おまんこに指一本触れられていないのにそんなにドロドロにして……まん汁の飛沫がび

ちやびちや飛び散ってるぞ？」

「うるさい♡うるさいいい……♡♡」

乳首に与えられる痒みと、乳房を締め上げる肉紐の痛み。そして乳房の奥からこみあげ、甘い疼き。

全てがぐちゃぐちゃに混ざり合い、果たしてどの感覚が正しいのか分からなくなってくる。

「あおおお♡んっ♡ひっ♡おごっ♡」

「クク、へこへこ腰を振って発情したメス犬そのものだ。乳首だけでそんなにまんこをびちよびちよに出来るなんて淫乱の素質があるぞ」

「だ、誰が……♡あっひ♡おお♡んおお♡♡」

「ずぞぞぞお♡♡♡」

ギリギリまで耐えていた理性をぶち壊すかのように、肉蕾が強く乳房を吸い上げる。

乳首を激しく吸引され、快感のメーターが一気に跳ね上がった。

「おっほおおお♡おっぱいっ♡ちゅーちゅーらめっ♡やめろっ♡やめろおおお♡♡」

襲い来る法悦にワケも分からず腰を突き上げる。乳房の中を熱い塊が埋め尽くし、乳首の先端に向かって登ってくるのが分かる。

「やだっ♡何これっ♡出りゅう♡なんか出ちゃううう♡♡あうっ♡嘘っ、嘘おおっ

♡

ぱくり♡と肉蕾が乳首に嘸みついた瞬間――

ぷしゅうううううう♡♡

両乳の先端から、乳白色の液体が細く噴き出した。

「ああああ……♡妊娠してないのにつ♡おっぱい出てる♡なんでえええ……♡♡」

信じられない光景に、ただ呆然とするしかない。

クロードは嬉々とした様子で、ぱちぱちと手を叩いた。

「ハハハ！ エロデカ乳からびゅーびゅー母乳まき散らしてみつともないなあ！ いいぞ、

ベアトリス。最高だよ……♡これで一步、俺ごのみの女に近付いた」

「わっ……私の身体をつ♡化け物にする気かつ♡♡」

「ある意味、そうかもな。今のお前さんも充分魅力的だが――どうせならもつと深く愛し

てやりたい」

「ふぎけるな……あああつ♡」

つんつ♡

クロードの指先が、無防備な肉芽を突く。

「次はコッチだ。俺はデカクリの女が好きでねえ。お前さんの小さくて愛らしいが、や

や物足りない」

「……ッ♡まさか、こっちも……？」

「ああ。立派なクリちんぽに改造してやるから。楽しみにしてくれ」

「ッ、い、イヤだあああ……ッ♡やめろっ♡やめろおおお♡♡」

ぬちゅううう♡じゅぷ♡じゅぷ♡

今度は小さな蕾状の肉根が、私のクリトリスに吸い付いた。

「ひぐううう♡♡す、吸い付くなあああ♡」

ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡ぢゅっぽ♡

吸い上げられる度に、微細なブラシ状の肉根が淫核を抜く。

たちまちクリトリスが充血しむりむりい♡つと膨らんでゆく。

肉紐が股間に伸び、器用に包皮をムキムキ♡して、桃色に色づいた淫核が剥き出しになった。

「いい感じに仕上がつてきたじゃないか。でも、まだまだだな。俺がフェラチオ出来るくらいプリプリデカクリになつてもらわないと」

指でつう♡つとクリトリスの根元をなぞられ、びくん♡と身体が跳ね上がる。

「何……がっ……デカクリ……だっ♡貴様の望む身体になど……なりたくも……ないっ

……♡♡♡」

「そう言うなよ。クリイキ出来るようなドスケベボディになつちまえば、イクことだけを

考えていられる。お前さんは騎士の誇りとやらの囚われすぎて自分をがんじがらめにして
いるように見える。そんなもの吹っ飛ばした方が、幸せだと思わないか？」

「分かったような口を……利くなッ……♡わっ……♡私がどんな思いで……これまで……
戦ってきたか♡知りもしない……♡くせにッ♡♡♡」

むにいい♡♡と淫芽を引つ張り上げられてクリトリスが一層腫れ上がる。

むくむく♡と勃起したクリトリスは張り詰めて、根元がパンパン♡で痛いくらいだ。
敏感になった肉芽の肌を、ごしっ♡ごしっ♡と織毛ブラシが絶え間なく擦り上げる。

裏筋をこしこしこしこし♡と小刻みに扱かれると、全身から力が抜けて膝から崩れ落
ちそうになる。

（奪われてりゅっ♡私からっ♡騎士の誇りがっ♡おちんぼクリとメス牛おっぱいにされて
っ♡クロードの肉オナホにされてしまうっ♡♡）

耐えず与えられる強烈な快感で頭が痺れて、思考がふやけていくのを必死に押しとどめ
る。

（負けないっ♡こんな卑怯なッ♡化け物に身体を改造させるなどっ♡絶対につ♡屈しない
ッ♡♡）

【続きは製品版でお楽しみください！】